

超白刃
Beat Blades

-Beat Blades Hareka-

ハルカ編



原作◆アリスソフト

著者◆深町薰

挿画◆ベンジャミン

目 次

プロローグ	005
第一章	017
第二章	049
第三章	085
第四章	109
第五章	141
第六章	177
エピローグ	206



プロローグ

とき
刻は子の刻。

山中にたたずむ城内で、二つの刃が己の存在をかけて、人知れずぶつかり合っていた。一つは闇に浮かぶ炎のごとく、漆黒の憎しみに燃える刃。そして、もう一つは闇夜を照らす月のごとき、希望に満ちた正義の刃。

「この姿がここまで追い詰められるとは……」

ハルカも体力を消耗していたが、桔梗太夫ききょうだゆうはもつと深手を負っていた。ハルカは閃忍せんにんとしてまだ不完全な状態ではあるものの、今回はかなりの力を出すことができた。それもこれもスバルの助けがあつたからだ。

ハルカは動きやすいように短めの紫色の忍装束を着ており、武器である短刀を両手に握り締めていた。

「観念なさい。今夜があなたの最後の刻です」

「ぬかすな、小娘。わらわ妾わらわはまだ生きる。生きて生きて生きて貪むさぼるのじゃ！」

桔梗太夫せいだゆうは恐ろしい表情を浮かべながら、そう言い放った。だが、ここまでできても負けを認めず、生にしがみつく姿は非常に醜く見える。

桔梗太夫はノロイ党の幹部で、四道封者しどうふうしゃの紅門天こうもんてんだ。強敵ではあるが、ほかの幹部に比べると、ストイックなところがなく、エゴの塊のような女だった。

派手な赤い着物を身につけ、遊女のような雰囲気を漂わせている。桔梗太夫はその外見からも分かるように、淫靡いんびで陰湿な性格だった。

ハルカとの戦いに敗れ、桔梗太夫は今にも倒れそうな状態だ。ハルカはとどめを刺すため、短刀を構え、桔梗太夫に切りつけた。

「上弦忍法じょうげんにんぱう！ 穿せん！ 四門五月雨しほんさみだれ！」

「うああああっ！」

桔梗太夫はハルカの右手の短刀を何とか受け止めたが、左手の方はかわし切れなかつた。鋭い刃が彼女の体を切り裂き、血が飛び散る。

「イヤじや、妾はまだ死なぬ、ぎやああああっ！」

絶叫を上げながら、桔梗太夫の体は崩れ落ち、動かなくなつた。この城は崩壊し始めており、たとえまだ桔梗太夫が死んでいなかつたとしても、このままにしておけば、城と運命を共にすることになるに違ひない。

「忍務完了」

ハルカは仲間のスバルと一緒に城から脱出した。辛うじて桔梗太夫を倒すことができたが、時間がかかりすぎたかもしれない。

ハルカとスバルはノロイがいる無限城に向かつた。

「何としても、ノロイが逃げるのを食い止めねば……」

森を走り抜けながら、スバルがハルカにそう言つた。ノロイ党は盲目の法師である骸居炎斎が興した組織で、恐怖により世に安寧をもたらそうとしていた。彼らは様々な怪忍を送り込み、村々を破壊したり、人々に危害を加えたりして、世の中を乱れさせ、多くの人に恐怖を与えてきた。

「スバル、いよいよノロイの正体が分かるんですね」

救世主として彼らにあがめられているのが、ノロイと呼ばれる謎の存在だつた。ノロイについては、まだよく分かつていない部分が多い。

その手下である怪忍は一種の化け物であり、ノロイの力を得て、人間や動物が姿を変えたものだ。

ノロイは人間たちの嘆き、恐怖、悲しみを糧にして生きているといわれ、普通の生物ではなく、超自然的な存在であるという情報も流れている。

とにかく、ノロイは炎斎や桔梗太夫を操り、その超常的な力によつて、この世に恐怖をもたらし、世界を支配しようとしていた。

「何者かは分からぬが、ノロイを倒すのが、我ら上弦衆の使命だ」
スバルの言うように、ノロイと戦い、平和を守ろうとしているのが、二人が所属する上弦

衆だつた。忍者集団である上弦衆ははるか昔から、ノロイを滅ぼすための戦いを続けていた。

上弦衆との戦いにより、ノロイの力はだいぶ弱まつていたが、敵は一発逆転を狙つて、上弦衆の里から秘宝を盗み出し、その力を使つて、時を渡り未来へ行こうとしていた。

「ノロイたちに時渡りをさせてはならぬ」

未来に渡れば、そこには上弦衆もおらず、人々を簡単に支配することができると考えたのだ。今はそれを阻止し、ノロイの息の根を止める時だつた。

ハルカはスバルとともに走り続けた。スバルはハルカの先輩であり、二人で組んで行動することが多い。

スバルはハルカに対し、常に厳しく接していた。戦いについても、人生についても、ハルカはスバルからいろいろなことを教わつた。

スバルはクールな雰囲気の美人だ。すらりと背が高く、長い髪を後ろでまとめている。先輩としては面倒見がいいところがあり、その振る舞いには優しさが垣間見える時もあつた。ハルカはスバルのような女性になることを目指していた。

「青龍城まであと少しです」

上弦衆のくノ一は閃忍と呼ばれていた。閃忍は特別な力を持っており、桔梗太夫や怪忍たちと互角に戦うことができる。

ハルカはまだ不完全だが、スバルは変身することにより、最高の力を發揮することが可能

となる。

閃忍はある方法によつて頭領から力を与えられるが、ハルカはどうしてもその行為を実行に移す勇気が持てなかつた。だから、いまだ完全な閃忍にはなれずについた。

二人は青龍城の正門の前まで來た。ここも既に上弦衆の仲間によつて攻略され、城から火の手が上がり始めていた。

その時、それほど離れていないところで鐘の音が聞こえた。その音は何か不吉な前触れのようにハルカの耳に響いた。

「何、この鐘の音は……？」

「時渡りの儀が始まるのだ」

そう言つたのは、いつの間にか門の前に立つていた鋼一刀はがねいとうだつた。

一刀はノロイ党の副党首で、四道封者の白門天びやくもんてんだ。剣の腕が立ち、ノロイ党最強の剣士といわれている。

開け放たれた門の向こうに真っ赤な炎が見えた。一刀はそれを背景にして、動じることもなく、静かに立つていた。

藍色の着流しに、長い太刀を腰に一本差している。その周りには研ぎ澄まされた静かな殺氣が漂つていた。

「上弦衆、ここまで來るとは、炎斎殿が恐れていたとおりになつたな。おまえたち、名は何と

い
う?

一刀が落ち着いた口調でそう尋ねた。

「上弦衆が閃忍、スバル」

「同じく、ハルカ」

二人は一刀の殺気に負けないように、気を落ち着かせながら名乗った。

「ハルカか……」

一刀はハルカの名前に何らかの興味を持つたようだが、それ以上は何も尋ねなかつた。ハルカは一刀の名前を知つていたが、実際に会うのは今日が初めてだつた。

「鋼一刀、我ら、上弦衆の意を伝えにきた。すぐに時渡りをやめろ」

スバルがそんなふうに言葉をかけた。

「それはできぬ。我らが求めし天上無窮てんじょうむきゅう、ノロイの復活がなくば叶わぬ。桔梗太夫おうかを倒した
武勇に敬意を払い、命までは取らぬ。この場より立ち去り、この時代の平穏を謳歌おうかして生きよ」

「できぬな。我らが大義は己が幸せにあらず」

「月光のごとく、世の闇に灯をともす。それが我ら上弦衆の使命。どうしても退くわけにはいきません」

二人はそう答えた。

「そうか……」

それだけ言うと、一刀は両手で刀を抜いた。二刀流だ。ゆっくりした動きだが、どこにもすきが見られなかつた。

それから、一刀は二本の剣を十字に構えた。落ち着いた態度は変わらないが、眼光が鋭さを増している。

「では、来るがいい、上弦衆」

一刀を倒さなければ、ノロイのところにたどり着くことはできないのだ。

「私がこの男の相手をする。ハルカは休んでいろ。そうしないと、力が回復しないぞ」

スバルがハルカにそう声をかけた。確かに、ハルカは桔梗太夫との戦いで、だいぶエネルギーを消耗していた。

たとえ一刀を倒すことができたとしても、ノロイをこの世から葬り去るまで、この戦いは続くのだ。

ハルカはスバルの言葉に従つた。一刀は強敵だが、スバルだって最高の閃忍なのだ。ハルカはいつでも手助けできるように後ろに下がつた。

スバルは持っていた長めの刀を構えた。スバルも一刀も間合いをはかつてている。二人とも大きな動きはないが、気合を高めているようだ。

最初に動いたのは、スバルだった。十字に剣を構える一刀に切りかかっていく。

ハルカにははつきりとは分からなかつたが、一瞬、一刀の体の側面にすきができたようにな
思えた。

「斬ざん！　凍牙疾風とうがしつぶう！」

スバルは一刀の懷に飛び込み、その刀が敵の体をとらえたように見えた。だが、その前に、一刀が目にも止まらぬ速さで動いたのだ。

どうやら、一刀はスバルが先に動くのを待っていたようだつた。
もしかすると、すきを見せたのも罠であり、相手の動きを誘うため、わざとやつたことだつたのかもしれない。

一刀は片方の刀でスバルの剣を受け、その体を押し戻した。そして、彼女がバランスを崩したところで、もう片方の刀をスバルの肩に振りおろした。

「あああああっ！」

スバルが長い悲鳴を上げた。次の瞬間、何かが彼女の体から吹き飛んだ。そして、そのままスバルは地面に崩れ落ちた。

「スバル！」

ハルカはそう叫び、スバルに駆け寄つた。

「くううつ、くううつ……」

倒れたスバルは苦悶の表情を浮かべ、右肩をつかんだが、そこにはあるべきはずのものが



なかつた。

先ほど吹き飛んだのは、一刀に切られたスバルの右腕だったのだ。全身を強化している閃忍の腕を、一振りで切断するとは、恐ろしい剣技だった。

「首を狙つたのだが、かわされたようだな」

一刀が低い声でそんなふうに言つた。スバルは危ういところで首を切られるのを免れたらしい。しかし、片腕を失つてしまつた。

切り株のような切り口からは真っ赤な血が流れ落ち、スバルの足元に血だまりを作つており、整つた顔にまで鮮血が飛んでいる。地面上には、切断された右腕が転がつていた。

一刀はとどめを刺すため、傷ついたスバルに近づいた。ハルカはスバルを守るため、短刀を構え、二人の間に体を割り込ませた。

「鋼一刀。次は、私が相手です」

「ハ、ハルカ……」

スバルは重傷を負つていてもかかわらず、体を起こし、ハルカを押しとどめた。

「いいか、ハルカ、ノロイを討ち、時渡りを止めるのが我らの命。だが、今の我らの力では、ノロイは討てぬ」

スバルは一刀に聞かれないように、ハルカだけに小さな声でそう語つた。冷静に考えれば、スバルが言つていることは否定できなかつた。